



戦後文化運動雑誌叢書13

東北文学

復刻版

全8巻・別冊1
 ◎河北新報社 発行(1946年〜1950年)
 ◎別冊 冊II解説(高橋秀太郎)・総目次・索引
 ◎推 薦II安藤 宏・石川 巧・澤 正宏・山田有策
 ◎本体価格1145,000円+税

東北の地から戦後の「文芸復興」を志した総合文芸誌を復刻。

多彩で独特の文学を輩出してきた東北の想像力と作家同士の交流が戦後文学に与えた影響とは――。

不二出版

復刻版概要

東北文学 全8巻 別冊1

- ◎原本発行II河北新報社(1946年1月〜1950年5月)
- ◎体 裁II A5判/上製/総4、134頁
- ◎別 冊II解説・総目次・索引
- ◎解 説II高橋秀太郎(東北工業大学共通教育センター准教授)
- ◎推 薦II安藤 宏・石川 巧・澤 正宏・山田有策
- ◎原本提供II宮城県図書館、気仙沼市図書館
- ◎本体価格1145,000円+税

各巻分売可。復刻版各巻本体18,000円、別冊は1,000円です。

◎配本概要 ※ISBNには頭に「978-4-8350-」が付きます。

| 第2回配本 | | 第1回配本 | | | | 配本 | 収録号 | 各巻ISBN | 価格・ISBN | |
|---|-----------------------------|------------------------------------|---------------------------|-----------|---|---------------------------|-----------------------------|-----------------------------|--------------------------|-----|
| 第8巻 | 第7巻 | 第6巻 | 第5巻 | 別冊 | 第4巻 | 第3巻 | | | | 第2巻 |
| 第4巻第11・12号〜第5巻第4・5号(1949年12月〜1950年5月) | 第4巻第6号〜第4巻第10号(1949年6月〜10月) | 第3巻第10号〜第4巻第4・5号(1948年10月〜1949年5月) | 第3巻第2号〜第3巻第9号(1948年2月〜9月) | 解説・総目次・索引 | 第2巻第6号〜第3巻第1号(1947年6月〜1948年1月) | 第2巻第1号〜第2巻第5号(1947年1月〜5月) | 第1巻第8号〜第1巻第12号(1946年8月〜12月) | 第1巻第1号〜第1巻第6・7号(1946年1月〜7月) | 創刊号〜第1巻第6・7号(1946年1月〜7月) | |
| 794913 | 794816 | 794719 | 794612 | 794418 | 794311 | 794214 | 794117 | 794010 | | |
| 本体72,000円+税 ISBN 7945-5 2017年1月刊行 | | | | | 本体73,000円+税 ISBN 7939-4 2016年9月刊行 | | | | | |



▶第3巻第9号表紙



▶第4巻第3号表紙

表示価格はすべて税別

不二出版

〒113-0023
 東京都文京区向丘1-2-12
 電話03-3812-4433
 ファクシミリ03-3812-4464
 振替001600294084

『東北文学』復刻を喜ぶ

安藤 宏 (東京大学教授)

終戦直後、東京が焼け野原になったのを受けて、「文壇」もまた一時
期空白状態になっていた。その中で地方に疎開した作家たちを中心に、
「疎開ネットワーク」とでもいいうべき興味深い現象が生まれ、各地で文
芸誌の発刊が相次ぐことになる。中でも「東北文学」と「九州文学」は
特別な存在で、一地方誌のレベルを明らかに超えたものだった。創刊当
初の豪華な執筆陣を見ても、中央文壇の役割を肩代わりしようとする面
目を見て取ることができるだろう。

私のように太宰治のことを調べている人間にとって、「東北文学」は
やはり特別な存在である。単に疎開時代に執筆の舞台になっただけでな
く、その死(昭和二年六月)に際して数多く寄せられた追悼記事は、
太宰をよく知る人々の声として、いずれも重要なものばかりである。「東
北文学」の消長は、まさに狭義の「戦後」そのものであり、太宰治の死
もまた、「疎開ネットワーク」が復興の中で消えていく象徴的な意味を
持っていたのかもしれない。

創刊当初の号は今日でも市場で見える機会が多く、当時に広く読ま
れていたかがうかがえるのだが、昭和二四年前後から、見かける機会が
急速に減っていく。当然、
完全セットを入手するのは
困難だったので、その意味
でも今回の復刻は喜ばし
い。これを機に、疎開期の
研究が一層進展することを
願う次第である。

太宰治氏の急逝を衷心より悼む

●私が東京に於いてはじめて発表した作品は「魚腹記」といふ十八
枚の短編小説で、その翌月から「思ひ出」といふ百枚の小説を三回
にかけて発表した。(昭和八年)
●死ぬるばかりの孫若と自嘲と恐怖の中で、死にせず私は、身勝
手な、遺書と稱する一冊の作品に就つてゐた。
●私は書き上げた作品を、大きい紙袋に、三つ四つと貯蔵した。次第
に作品の數も増えて来た。その袋に毛筆で「晩年」と書いた。もう、
これでおしまいたいといふ意味なのである。(昭和八年)
●私はサロン懸術、サロン思想を否定した。

▲「太宰治氏の急逝を衷心より悼む」(第3巻第7号)

エイトスとしての『東北文学』

石川 巧 (立教大学教授)

敗戦後、人々はその日を食いつなぐことに精一杯だった。外地にあっ
た主要製紙工場を失い、印刷用紙を入手すること自体が困難だった時代
にあって、雑誌は贅沢品だった。にもかかわらず、人々は活字を貪るよ
うに読んだ。

こうした世相を背景に、戦後の地方都市では新聞社が中心となって総
合雑誌を創刊する動きが活発になる。もちろんそこには、読者に清新な
時代の息吹を届け、新しい地方文化を創造しようという理念があった。
戦禍を逃れた疎開者や地縁のある文人に執筆の場を提供し、新聞社とし
ての地力を高めようとする狙いもあった。だが、それ以上に重要だった
のは、雑誌を読むことは無縁の生活をしてきた人々に活字を介して世
界が広がることの喜びを知ってもらうことだったのではないだろうか。

雑誌「東北文学」は、それを裏付けるように戦後五年間にわたって一
貫した編集方針を続けた。同系雑誌のほとんどが「○○春秋」「月刊○○」
といったタイトルを付し、政治・経済・社会問題から漫画、映画紹介、
ゴシップといった娯楽記事までを幅広く扱う総合文化雑誌を志向するな
か、敢えて「文学」に特化した誌面構成を図り、創作のみならず最新の
文学論や文学研究にもアンテナを張り巡らせた。東北在住の新しい書き
手を数多く発掘し、農民文学やプロレタリア文学に関連する文学運動を
推進するとともに、東北帝国大学に所属する優れた文学者が編集に加わ
り、世界文学との接点を持ち続けた。

そこには、辺境といわれた東北の地から文学の存在意義を問おうとす
る野心と矜持があった。「東北文学」の実践は戦後日本文学のエイトス
として、いまでも確固とした足跡を残している。

『東北文学』と現代詩

澤 正宏 (福島大学名誉教授)

かつて東北には宮澤賢治、高村光太郎、尾形龜之助、北園克衛らが寄
稿した『北方詩人』(一九二七年〜一九六二年、第五次まで、全四五冊
確認)という詩誌が存在した。この度、不二出版で復刻される『東北文学』
は敗戦直後に創刊された総合文芸誌であり、東北にとどまらず、戦後の
出発期の、日本の現代文学における戦争の受け止め方が再検討できる貴
重な雑誌であるが、散文が中心にならざるをえない特色の中に、当時の
日本の現代詩が直面していた問題も確認できる記事(作品、詩論など)
が掲載されているのである。

その代表的な問題のひとつに、現代詩の変革ということがあった。勿
論、敗戦による喪失感(菱山修三、上野菊江などの詩)や、東北の自然
や生活との新たな出会いと深まり(真壁仁などの詩)などの表現はみら
れる。しかし、長光太の五七、七五調を日本語の本質的な韻律とせず、
「押韻の探究」を不毛として「マチネ・ポエチック」を批判する詩論や、
これとは対照的なこいけ・ただおの、詩の大衆性を考えるが故に、詩の
感情、思想にどれだけ韻文形式を盛り籠めたかを問い、日本の詩歌の伝
統の復興を考える詩論、さらに、北川冬彦の「定型なき定型」が存在す
るといふシナリオ形式に、新しい「叙事詩」の復興を説く詩論などは、
これらの主張が、その後の戦後詩の展開のなかでどう受容されたのか、
あるいはされなかったのかなどを含めて、いままお検討に値する課題だ
と考える。

光は東北仙台から

山田 有策 (東京学芸大学名誉教授)

太宰治に「たづねびと」(昭和二一・一一、『東北文学』)という短
篇がある。戦争末期の昭和二〇年七月末、幼い子供二人をかかえた夫婦
が故郷の津軽を目指して苦難に満ちた逃避行を続ける。ほとんどの都市
が空襲で焼き払われ、交通も寸断された状況下での惨憺たる列車の旅。
子供たちは病いがちで食料もつき果てている。こうした悲惨な旅を太宰
は独特のユーモアをまじえて鮮やかに描出しているが、小説はこのまま
では終わらない。困窮し尽した二人の頭上から若い女の声が降り、同時に
蒸しパンや赤飯や卵などが与えられるのだ。そして、この女性はすぐに
仙台駅で降りていってしまう。まさしく、この家族にとって光は東北仙
台から降り注いだのである。

ところで小説はここで終わったわけではない。小説のオープニングで語
り手はこの小説の掲載誌が『東北文学』という文学雑誌であり、仙台の
河北新報社から発行されていることを明らかにしている。そして、戦時
下の逃避行を回想し、仙台で降り、去っていった若い女の人をさがして
欲しいと読者に呼びかけているのだ。掲載誌の宣伝をかねた太宰特有の
サービスピ精神に満ちた快作といってよい。太宰の死後、『東北文学』がす
ぐ特集号(昭和二三・八)を組んだのもその返礼であったかもしれない。
いずれにしても、この「たづねび
と」一篇を掲載したことで『東北
文学』の光はいつそう輝かしいも
のとなっているのではないか。
『東北文学』の復刻を心より喜
びたい。



▲「たづねびと」(第1巻第11号)

